

第36回登別市市民自治推進委員会 ぬくもり部会議事録

(敬称略)

開催日時	令和4年12月21日(水) 17時30分～19時00分
開催場所	登別市役所本庁舎 2階 第2委員会室
出席者	(部会長) 田渕 純勝 (副部会長) 雨洗 康江 (部会員) 鎌田 和子、今 順子、山田 正幸、佐藤 画美 (庁内委員) 平田 雅樹、安部 直也 (関係職員) 川村 義一、若松 伸一郎(こども育成グループ) (事務局) 大越 智輝、佐々木 健、塚谷 温子
欠席者	なし
議題	・登別市総合計画第3期基本計画・第3次実施計画の内容確認 (こども育成グループ所管分)

【登別市総合計画第3期基本計画・第3次実施計画の内容確認】

第3次実施計画のうち、こども育成グループの所管事業の説明を行い、委員と質疑応答を行った。概要は次のとおり。

【質疑及び意見】

●教育・保育施設等給付事業及び普通保育所運営管理業務委託 (部会員)

幼稚園や保育施設を支援していくという事業内容については理解したが、この事業が人口減少対策にどう影響しているか把握はしているのか。

(関係職員)

これらの事業が人口減少対策にどう影響しているかまでは把握していない。今説明を行った事業は、平等に教育が受けられることを目的とした国の施策である。市独自の事業としては、保育所等で自己負担となっている主食費の補助制度がある。また、北海道の事業としては、所得制限はあるものの、二人目以降の保育所等の費用補助があり、実質負担がゼロとなる事業がある。

(部会長)

これらの施策について、子育てをされている最中の方には周知されていると思うが、これから子育てをしていく世代への周知はされているのか。

(関係職員)

目立った周知活動は行えていない。教育・保育施設等の補助は世帯の所得やこどもの人数などで大きく変わってくるため、画一的な周知が難しい。個別にお問い合わせいただいた際には、状況を詳しく聞き取って細やかな説明を行っている。

(部会員)

現在登別市の人口は減少傾向で、こどもの数も減ってきている。資料には教育需要が増加傾向にあるとの話があったが、具体的にはどのようなことか。

(関係職員)

市全体の人口は減っているにもかかわらず、保育所の利用希望者は横ばい、または微増であるため、比率的には上昇傾向にある。

社会情勢の変化からか、過去にはなかった需要も増えているように見受けられる。需要がある限り保育や教育を受けられないこどもを出さないように、受け入れの枠を確保していく必要があると考える。

(部会員)

保育所の利用率が増加傾向にある理由は何が考えられるのか。

(関係職員)

様々な状況がある。収入を得るために働かざるを得ずにこどもを預ける場合や、こどもを預けたいから働きに出るという場合もある。また、保護者の体調不良等でこどもの世話が難しい場合も保育所を利用できる。こうした様々な要件が複合して保育の需要が高まっていると考えられる。

(部会員)

普通保育所運営管理業務委託料の事業の目的に「民間の手法や技術を取り入れて、～」と書いてあるが、どういったことを指すのか。

(関係職員)

現在、市内5つの保育所のうち登別保育所、栄町保育所、幌別東保育所の3保育所について民間に運営委託を行っており、その3保育所の施設運営のノウハウを取り入れることを指している。

(部会員)

町内会などの地域でも日々の見守りや行事の開催などで地域のこどもたちと関わっている。地域へもこどもの教育に関する支援を行えば、より地域が一体となってこどもを育てていく環境が整うのではないか。

(部会員)

自分は幼児教育に携わる立場であり、その視点から皆さんにご理解いただきたい点がある。

教育の現場から見ても保育の需要の高まりは感じている。現代社会では働く女性が増えたことや、出産後早期に仕事復帰される方が増えたことも要因だと考える。

しかし一方で、過去にはなかったような育児に関する相談が保育所や幼稚園になされるなど、保護者の育児能力低下という課題も感じられる。そのため、預かりだけではなく、保護者の育児の支援ということも求められた結果、需要が高まっているのではないかと。

こうした状況から、現場では質の向上も求められ職務が過密となり、全国では残念な事件が起こっているのが現状である。

このように、教育・保育施設では教育だけではなく、保護者に対する幅広い支援も求められている。職員不足なども問題となる中で、質を維持するために行政の補助はとても助けとなっている。

地域の協力をいただくことは大変ありがたいが、その上で教育・保育施設の現状も理解いただけるとありがたい。

現在の登別市では人口が減っているが、全国の市町村の話などを聞いている中では教育が充実している自治体では緩やかではあるものの、子育て世帯が増えていると聞いている。

登別市は行政からも地域の方からも教育・保育にご理解とご協力いただいていると感じ、大変感謝している。今後ともご協力いただけるとありがたい。

●子育て支援センター運営事業

(部会員)

時代が変わり、たくさんの子育てに関する支援があることを知った。

社会全体で子育てしていくことが大切で、悩んでいる保護者の皆さんに光が当たるよう目配りすることが求められていると思うが、事業の周知はされているのか。

(関係職員)

子育て支援センターに関しては、新型コロナウイルス感染症で閉鎖となったり、利用制限を設けていることもあり、その際に施設を利用できない方へ向けて、自宅のできる遊びの動画を作成し、ウェブサイトで公開するなど周知に努めた。また、登別中央ショッピングセンターアーニスでのポスター掲示など周知に努めている。

(関係職員)

お子さんが生まれた後に行われている「赤ちゃん訪問」という保健師等による直接訪問の事業があるが、その際に子育て支援センターやその他子育てに関する情報を提供している。

(部会員)

子育て支援センターは市内で4箇所ということだが、こどもが比較的多い美園・若草地区には子育て支援センターはないのか。

(関係職員)

美園・若草地区で最寄りの支援センターは鷺別子育て支援センターである。鷺別子育て支援センターは平成30年から開設されているが、それ以前については、若草小学校の児童クラブであったり、若草つどいセンター、鷺別公民館（現鷺別コミュニティセンター）、であえーるはまなす団地の集会所などに出張して実施していた。鷺別子育て支援センターが開設されたことにより、これらの事業が集約された。

美園から歩いて鷺別子育て支援センターを利用している方もいる。

富岸子育てひろばを作る際も、その位置関係から設置についての検討がされたが、富岸子育てひろばは亀田記念公園にあるため、自然などの特色を生かした事業が行えることを見込んで設置した。

(部会員)

利用したい方の移動手段について、小さいこどもを抱えての移動は大変だと思われる。自家用車を持っていないなど、行きたくても行けない方について、なにか手段はあるのか。

(関係職員)

現在は移動手段についての用意はない。

(部会員)

各子育て支援センターの利用状況はどうか。

(関係職員)

亀田記念公園の自然を生かした活動を行ったり、土曜日も開設していたりする富岸子育てひろばや、平日の午前中は毎日開設している鷺別子育て支援センターなど、各所に特色があり、利用者もニーズに応じて使い分けているようである。

例えば、初めて施設を利用するお子さんがいる場合、遠くても小規模な子育て支援センターを利用される場合があったり、クリスマス会などのイベントが開催される場合、遠くの支援センターでも足を運んだりする場合がある。

(部会員)

子育て支援センターは、住んでいる地域に近い場所ではなくても利用してよいのか。

(関係職員)

どこの施設を利用してもよい。感染症による制限や、子育て講座や利用者が多くなることが見込まれるイベントがある場合を除き、基本的に予約なども必要ない。

(部会員)

どこのセンターの利用率が一番高いのか。

(関係職員)

開設している時間との関係もあり、延べ人数で考えるとどの施設も同程度だが、利用率で考えると驚別子育て支援センターの利用率は高い。

(部会員)

障がいのあるこどもの受け入れについてどういったものがあるか。

(関係職員)

市が設置しているものとしては、のぞみ園にて心の発達支援や放課後デイサービスなどの支援を行っている。

民間事業者も市内で4カ所ほどあり、行政としてそこへ費用の支援を行っている。

(部会員)

子育て支援センターを利用したこどもに障がいがあった場合はそういった施設を紹介しているのか。

(関係職員)

子育て支援センターなどで集団に入ってみて、こどもの発達に不安をいだき、保健師や保育士に相談いただくことが多い。子育て支援センターでそういった相談を保育士が受けた場合は話を聞いて保健師に繋ぎ、必要に応じて障がい者支援を行っている。

(部会員)

子育て支援センターには資格がある職員がいるのか。

(関係職員)

保育士や、子育て支援員の研修を受けている者が配置されている。

(部会員)

全体的な話で、人口が減っている中で職員の数も限られていると思うが、保育所の定員などはどうか。

(関係職員)

まず前提として、利用希望があってもどこにも入ることができない場合を待機児童といい、利用希望施設に入れないが、別の施設であれば利用可能である場合を潜在待機児童という。

年度当初での待機児童は0である。しかし、毎月の誕生日を迎えて施設利用の年齢に到達したなどの理由で、年度途中も利用希望が発生して潜在待機児童が発生する。令和4年11月を例にすると34名の潜在待機児童がいる。うち、ほとんどが3歳未満である。

保育士1人に対して0歳児は3人までしか見ることができないという国の基準などから、3歳未満は受け入れられる枠自体も少なく、どうしても潜在待機児童が発生してしまう。そうした場合、受け入れる余裕のある民間の事業者を紹介することで対応している。

ただし、年度ごとの入所希望に基づき4月から利用する段階では待機児童が発生していないという観点では、受け入れる体制は確保できているといえるのではないかと思う。しかし、年度の途中ではどうしても潜在待機児童がでてしまうので、そこについてどこまで対応できるかということが課題である。

(部会員)

1人の保育士が何人の児童をみることができると決まっているが、国の基準では仕事量的に厳しいところもあると思う。全国的に様々な事件が起こっており、登別市ではそのようなことが無いように努めていただきたい。

(関係職員)

一例だが、一歳児をみる場合に国の基準では6対1の保育士を置くこととなっているが、登別市独自の取り組みとして、この基準を5対1として手厚く対応している。

●次回 1月24日(火) 17:30～